

動向

中国における中日語彙対照研究の動向 2012

彭 広 陸

本稿は、2012年に中国国内で正式に発表された中国人の研究者による中日語彙対照研究の論考を紹介することを目的とするものである。わずかながら、2011年に公にされたもので本誌の昨年度の創刊号で取り上げることができなかったものもあるので、一緒に扱うこととする。言うまでもなく、筆者は目配りが不十分であり関係の論考に全部目を通してはいるわけではないため漏れがあるかもしれないことを断っておきたい。

1. 借用語の研究

2012年における中日語彙対照研究について特筆すべきは、なんと言っても借用語に関する研究論文が数多く発表されたことである。これは、『日語学習與研究』という研究誌の2012年第3号で借用語の特集が組まれたことと大いに関わっている。以下、上記の特集に掲載された論文を中心に紹介しておきたいと思う。

沈国威「日語借詞の研究」(『日語学習與研究』2012年第3号)は、大所高所に立って日本語からの借用語の研究を取り上げ、20世紀の初頭に日本語から大量に中国語に流入した語彙が現代中国語の語彙の形成に拍車をかけたことを指摘し、西洋→中国→日本→漢字文化圏という近代的知識の還流の視座の下で、日本語からの借用語の生成の契機、伝播・定着のプロセスおよび語形成・意味に見られる特徴などを鳥瞰的に論述し、日本語からの借用語

の研究の方法論、その任務などについて論じた。さらに、日本語からの借用語は他の言語からの借用語とは異なり、近代漢字文化圏における新語の一部であり、東洋が西洋の文明を受容する所産であることを強調し、日本語からの借用語の研究は中国語の語彙研究を大いに促進し、近代アジア研究にとって欠かせない基礎研究ともなることを主張している。

陳力衛「圍繞近代『新漢語』的一些問題」（『日語学習與研究』2012年第3号）は、近代日本語に急増した「漢語」に焦点を当てて、それは従来思われているようなほんの一時的な現象ではなく、明治期の1874～1909年の間における「漢語」が70%以上に上り、大正期に入ってから増加の勢いが衰えたことを雑誌の用語の調査結果をもって証明した上で、従来の研究は、近代の日本による洋学への吸収から生まれた「新漢語」の大量の生成が漢語の急増の大きな理由だとしているだけで、具体的な分析がなされていないことや、「新漢語」に対する誤解が混乱を起こしていることを指摘し、「新漢語」の帰属やその語源検証法に対して大きな疑問を投げかけた。

劉凡夫「以黃遵憲『日本国志』（1895）為語料的日語借詞研究」（『日語学習與研究』2012年第3号）は、黄遵憲の『日本国志』を考察の対象とし、近代の初期における中日言語接触を取り上げ、同書に見られる日本語からの借用語の形成・使用及び伝播について詳しく論じている。事例研究を通して、近代の初期に中国語によって借用された日本語の語彙は、漢語もあれば、新漢語もあり、さらに里帰りした古代中国語に由来する単語もあることを証明し、そういった日本語からの借用語は、中国語への定着に伴い、理解語彙から使用語彙への変化も見せており、戊戌変法期に現れた改革派による文章にはすでに日本語からの借用語の影響が見られることを指摘している。

朱京偉「『時務報』（1896～98）中的日語借詞——文本分析與二字詞部分」（『日語学習與研究』2012年第3号）は、日本語の語彙が中国語に影響を与え、中国に日本語からの借用語が現れ始めたのは、甲午中日戦争（日清戦争）の前後だとして、1895年に出版された黄遵憲の『日本国志』や1896年に創刊された『時務報』などが日本語からの借用語の普及に大きな役割を果たしていることを主張した。当該論文は、まず旬報である『時務報』におけ

る中日同形語を中心に計量的な調査をし、1552語を抽出した。それらの中
日同形語であるかどうかによって二分し、さらにその出自によって、再分類
した。

抽出した語	中日同形語	{	かつて日本語に借用されていた語
			明治期以後に日本語から中国語に借用された語
抽出した語	非中日同形語	{	一時的に中国語に借用されていた語
			清末に中国人によって新しく作られた語

さらに、二字熟語に絞って、出典の有無（『漢語大詞典』（1986～1993）と
『四庫全書』（電子版）に出典が見られるかどうか）、新義の有無（古代中国
語における語義と異なる新しい意味が見られるかどうか）を中心に考察し
た。その結果は次の表の通りである。

年度	冊数	二字熟語 (869語/56.0%)				三字 熟語	四字 熟語	多字 熟語	合計
		有典	新義	無典	未収				
1896	11-15	318	28	82	25	223	104	4	784
1897	16-49	232	30	36	32	187	70	15	602
1898	50-69	65	4	12	5	54	18	8	166
語数合計 (%)		615 (70.8)	62 (7.1)	130 (15.0)	62 (7.1)	464 (29.9)	192 (12.4)	27 (1.7)	1552 (100.0)

朱京偉「『時務報』（1896～98）中的日語借詞——三字詞與四字詞部分」
（『日本学研究』第22号、学苑出版社、2012年10月）は、上掲の論文の続き
であり、『時務報』における三字熟語と四字熟語を考察の対象とし、語構成
のパターンを中心に考察した。

李運博「『英華和訳字典』中出現的日語新詞」（『日語学習與研究』2012年
第3号）は、『英華和訳字典』に見られる日本語から借用した新語を扱って
いる。

借用語の個別語に関する論考には、以下のようなものが見られる。

彭広陸「從漢語的新詞看日語的影響——說“人脈”」（『日語学習與研究』
2012年第4号）は、近年中国語で広く使用されている「人脈」という単語
が日本語から借用したものであることを指摘した上で、「人脈」の、日本語

における発生時期や中国語への借用の時期及び日中両国語のそれぞれの辞書への収録状況などを調査し、中日両語における使用状況の異同を考察して、日本語からの借用語が中国語に定着した後は往々にして一人歩きをするようになり、変容を見せることが多いことを主張した。

千葉謙悟「近代中日詞彙交流個案研究——“奇迹”詞義的演變」（『日語學習與研究』2012年第4号）は、miracleの訳語であり中日同形語でもある「奇跡」という語を取り上げ、古代中国語に見られる「奇跡」という語は多義語ではあるものの、必ずしも近代的な意味を有しないが、一方、早くも19世紀の70年代においては、日本語における「奇跡」には近代的な意味が派生し、少なくとも19世紀の80年代にはすでに一般に使用されるようになっており、20世紀に入ってから中国語における近代的な意味での「奇跡」の使用は日本語からの影響によるものであり、日本語からの新義新語だということになることを主張している。

孫建軍「近代新詞“教科書”的生成與傳播」（『日語學習與研究』2012年第5号）は、中国語における「教科書」という語の語構成に見られる特殊性を手がかりにし、中日語彙交流史の観点から考察し、「教科書」という語が日本語に由来するものだと推測できる可能性を主張した。「教科書」という語の発生や伝播を考察するためには、まず「教科」という語の使用を究明する必要があるとして、明末清初に見られる宣教師による「教科」の使用は、日本語における「教科」と意味を異にするものがほとんどであることを指摘し、日本の近代的教育制度における「教科」の確立に伴い、「教科書」という単語も生まれたことを論じた。一方、中国では、1904年の『奏定学堂章程』の頒布により、中国語における「教科書」の使用は法的権威を得て定着し始めたという。

2. 個別語の研究

陳燕青「日語『ところ』和漢語“所”之本義考」（『日本学研究』第22号、学苑出版社、2012年10月）は、日本語の「ところ」と中国語の“所”の本

義をそれぞれ通時的に考察し、以下のようなことを明らかにした。日本語の「ところ」と中国語の“所”はもともと神霊または神格化された皇室や貴族が宿る場所を指すのに用いられていたが、現在普通に使われる一般的場所という意味はこのような神聖な場所をいう原始的意味から転じてきたものである。また漢字表記から見れば、上古では、「ところ」には「所」「處」「地」という表記が見られたが、これらの漢字は各自の機能分化が生じることによって現代日本語では「ところ」は専ら「所」という漢字で表記されるようになったのであるという。

陳建明「程度の比較に関わる日本語の『もっと』『さらに』と中国語の“更”“更加”の相違について」（『漢日語言対比研究論叢』第3輯、北京大学出版社、2012年8月）は、日本語の程度副詞「もっと」「さらに」と中国語の程度副詞“更”“更加”を取り上げ、それぞれの従属文に見られる用法やモダリティ表現との共起の実態を中心に記述し、それぞれの特殊性を論じた。さらに、「語用論的否定」「弱時間性」「程度の差への強調」という三つの意味から意味論的考察を加えた。

続三義「『手術する』與“做手术”、“动手术”——漢日対比語言学小議」（『日語研究』第8輯、商務印書館、2011年12月）は、日本語における「手術（手術をする／手術する）」と中国語の“做手术”“动手术”の比較をしている。それによると、「手術」に関しては、辞書では医者行為として記述されているが、「手術する」の場合は、日本語では、医者行為より患者行為を表すようになってきた経緯がある。一方、“手术”も同じ問題がある。辞書では医者行為として記述されているが、患者行為を表す用法もある。しかし、“做手术”に対して“动手术”という言葉もある。両者は同じ用法がある一方、“做手术”はより医者行為を表し、“动手术”はより患者行為を表すという。

李建華「論日文『氣』與中文“心”的關連性」（『語言文化比較研究』創刊号、白帝社、2012年6月）は、日本語における「氣」と中国語の“心”の關連性を論じている。

3. その他の研究

李愛華「從概念隱喻理論探討日漢同形詞的語義擴展」(『語言文化比較研究』(創刊号、白帝社、2012年6月)は、中国語と日本語の新聞の報道文に見られる、中日同形語でもある「蒸発」「沸騰」「凍結」「解凍」「昇華」「結晶」などの物質的变化を表す語を取り上げ、その意味拡張を記述している。考察の結果、それぞれの意味拡張はいずれもプロトタイプの意味に密接に関わっていることと、物質的变化への認知に関しては、中国語と日本語では相違点よりも共通点が多いことが明らかになり、それは異なる民族の間に見られる論理的思考の同質性によるものだと指摘している。

邱根成「試論漢日複音詞的多義現象」(『漢日語言対比研究論叢』第3輯、北京大学出版社、2012年8月)は、日本語の二字熟語と比較しながら中国語の「複音詞」に見られる多義語の形成のメカニズムと語用論的特徴を論じている。多義的現象は間接造語法として語義・語用の面から語彙を豊富なものに行っていることを指摘した上で、多義語の形成には、比喩・派生・意味素性の変化及び構造の変更などの手段があることを主張する。さらに、比喩と派生による新義には品詞的・語用的相違が見られることを論じ、意味素性の変化は漢字の多義性を利用しており、構造の変更は中国語の複音語に特有のものであり、日本語の二字熟語と類似しているものの、品詞の認定には相違が認められるという。

他には、張勇「從中日有関臉的表達看中日文化差異」(『語言文化比較研究』創刊号、白帝社、2012年6月)という論考も見られる。

彭広陸 Peng Guanglu 博士(文学) 北京大学教授 専門:日本語学